

ポール・パイヤ著（藤井良治訳）

『老年の社会学』

文庫クセジュ 553, 白水社, 1974年, 134ページ+xii

本書は Paul PAILLAT, *Sociologie de la vieillesse* (1971) の翻訳である。著者ポール・パイヤ氏は現在国立人口問題研究所で老人問題を担当している。本書は、パイヤ氏自身がその作業委員会の一員として名を連ねている第5次および第6次経済社会発展5ヶ年計画の立案の基礎となった豊富な資料とデータを基礎にして書かれたもので、フランスの老人問題、老人対策について知るのに適切な書物である。

本書は5つの章から構成されており、老人問題は単に老後の所得保障だけでなく、雇用、住宅、医療などの広範囲な観点から取り組まなければならない問題であることが強調されている。第1章は・人口学的統計と老齢化、第2章・生活手段と生活様式、第3章・退職と年金、第4章・職業活動、第5章・社会保障、となっており、出生、死亡の人口現象から始まって、家族、経済といった社会面から老人問題を把握している。

1960年、政府はピエール・ラロック氏を委員長とする「老人問題研究委員会」を創設した。著者はこの委員会のメンバーとして参加した関係上、収集された膨大な資料を利用する便宜を得た。著者によると、人口学的には「老齢化とは一国の人口の老齢者の割合の増加」のことであって、老齢者数の増加ではない。このことを取り違えることからしばしば混乱が生じると彼は示唆している。老齢化現象は医学の進歩に伴う平均寿命の延長によって生じたものではなく、出生率の減歩によって生じたものであることを強調している。

老齢化のさまざまな側面、とくに退職問題における人口学的要素の重要性に着目するとき、これに対して何らかの施策を考えなければならないとすれば、それは必然的に将来における人口学的な予想が基礎にならざるをえない。

老人にかかわりのある生活上の問題としては、所得と消費の様態とか、住宅、職業、家庭および社会関係、あるいは健康状態、性格、教育などあげることができるが、一般的に把握しにくいのは所得であろうと思われる。それは、税金の心配と現在老人たちが得ている手当や扶助を失うのではないかという心配からくる不信任と、自分が苦しい境遇にあることを第三者に打ち明けたがらない体面上の問題があるためである。また、老人を差別するのは職業活動である、一般的にひとは職業活動によって、収入を得たり、社会において安定した生活を維持できるし、肉体的にも、精神的にも安定出来るが、事実上、年齢とともに就職がむづかしくなっており、老人は差別されている。老人自身も新しい方法とか、技術への適応の低さ、実行速度の低下等によって、彼等自身100%の生産能力を保持できると思っていないのが現状である。

労働のいかんを問わず、老人に対する所得の保証は緊急な問題であり、老齢者の労働雇用の提起するさまざまな問題は無視できない。老人は単に休息の権利であるというだけではなく、ある年齢に達して仕事を続けられなくなった人たちに適切な社会的保護が保証されなければならないし、又寡婦となって生活の手段をもたない女性たちについても適切な処置を考えなければならないという意見が述べられている。

老人問題、老後問題は、人口の老齢化したフランスにとって、切実な問題である、それは、社会構造、産業構造の変化が原因であるだけではなく、人口構造の大きな変化によって生じたものであり、人口老齢化の途をたどりつつあるわが国にとっても大いに参考にすべき問題である。

（山本 道子）